

## 第6章 いじめの背景要因としての子どもの心理発達

保 坂 亨

第7章にみるように、これまで膨大ないじめ研究が行われていながら、唯一竹内（1987）が、前思春期から思春期にかけての自己の解体と再統合への心理発達プロセスにおける問題という興味深い視点を提出している以外に、子どもの心理発達という視点からのものはほとんどみられない。そこで、本論文ではこの面接調査研究をふまえ、いじめの背景要因としての子どもの心理発達を考えてみたい。

### 1 児童期の心理発達

集団教育という点では、今の子どもたちはほとんど例外なく幼稚園ないしは保育所でその洗礼を受けることになる。しかし、本格的かつ組織的な教育プログラムが始まるのは、（就学猶予などごく一部の例外を除いて）6才の小学校入学からといってよいだろう。子どもたちは、学校の中で学習指導を通じて知的発達を、生活指導を通じて集団における社会性の発達をとげていくことになる。児童期とは一般にこの学齢期を指し、通常6-12才の小学校段階にある子どもたちを意味する。

Freudの心理学的発達理論によれば、この児童期は欲動（リビドー）からの自我に対する脅かしが少ない安定した時期＝潜伏期<sup>(1)</sup>とされ、きたるべき思春期を乗り切るために必要な心理発達が認められるという。すなわち規範（ルール）の内面化である超自我形成と、欲求不満耐性や不安を緩和するさまざまな防衛機能の獲得などの自我形成によるパーソナリティの発達や、それらを基にした対人関係能力の発達がみられる。

この時期、とりわけ小学校低学年の子どもたちは、その親に現実的にも情緒的にも依存しており、大人社会の秩序に組み込まれ、かつ保護されている。当然自分より親や大人の判断を信頼しているため、大人社会から与えられる秩序（ルール）を疑うこともなければ、そうした守られた状況自体に疑問を持つこともない。児童期の心理発達は、こうした大人の庇護のもとで行われるという意味でも、後に述べる思春期とはちがって、きわめて安定した中で展開していく。

このとき学校において、子どもたちの前に大きな存在として立ち現れるのが学級担任である。すべての教科の

学習指導と生活指導、すなわち彼らの学校生活すべてにわたって面倒をみる、唯一の大人である。したがって、学校生活に慣れ始めた子どもが「先生」というところを思わず「お母さん！」と呼びかけてしまう、そんな存在であり、家庭における親に等しい学校生活における唯一の保護者である。子どもたちの学校生活は、とりわけ低学年においては、この学級担任に大きく依存した形で展開していく。当然、その影響力はきわめて強く、極端に言えばこの学級担任が提示するルール（教育方針）が子どもたちにとって唯一絶対のルールとなりうる。また、子どもたちの仲間関係の大きな力を考えれば、学校生活におけるもっとも重要な準拠集団である学級の存在が大きな意味を持つことはいうまでもない。それがゆえに親にしてみれば、どのような教師が自分の子どもの担任になるのかが気になり、その教育方針およびどのように学級が形成されるのか（学級経営）に関心を持たざるをえない。たとえば、近藤（1994）は、こうした学級担任とその学級集団が子どもに及ぼす影響を、実証的に検討している。

したがって、第3章にみられるように、本調査において被面接者から語られたこの時期のいじめにおいて、親や教師など大人のはっきりとした介入によっていじめが解決したと報告されるのは当然といえよう。いじめにかぎらず、この時期の友人関係のトラブルは、子どもたちの生活の中のこととはいえ、よく注意しているかぎり大人の目が届くところで起きているといってもよいだろう。

一方、小学校の中学年においては、この学級担任の存在の大きさは変わらないながら、先に述べた規範（ルール）の内面化が子どもたちにとっての課題となってくる。一例をあげれば、交通法規（学校教育でいえば安全教育）において、子どもたちは「危険だから赤信号は渡ってはいけない」というルールを身につける必要がある。当然、規範が内面化していくこの児童期に、大人がいわなくとも（あるいは見ていなくとも）自ら守るようになっていく。それどころか、大人がうっかり危険はないとして赤信号で渡ろうとしようものなら、ときとして「赤だから絶対渡っちゃいけないんだよ！」と言われかねない状態も起こり得る（岡村、1998）。規範の内面化が生み出す頑

なな超自我（＝どんなときでも赤信号は渡ってはいけない）によるものである。

こうした時期の子どもたちの具体的な学校での姿を見よう。斎藤（1997）は、ある小学校の4年生の学級生活を共にして、次のような観察を行っている。

『学校生活というのは、子どもにとって最初に体験する公的な場なのだと思う。「公的」であることを、わがクラスメートは一種の制約として意識し、受け入れているように、ぼくの目には見えた。教室にはさまざまなしきたりがあり、それをみんなはさほど厳格にでもなく、だからといって無視するというのでもなく守っている。そのしきたりによって秩序づけられた学校生活をまんざらでもないと思っているのが、はじめのうちはちょっとおかしかった。

例えば、授業が始まる時「これから1時間目の学習をはじめます」と日直がいい、みんなが「はじめます」ということになっている。終りのときはもちろん、「終わります」という。（中略）

この居ずまいを正しての「はじめます」と「終わります」は、公的秩序への入口と出口を確認する儀式なのだ。いくら学校が公的な場だといっても、校門に入るやいなや、子どもたちの表情に変化がおこるなどということはある得ない。朝の会が始まるまでと、休み時間には、子どもは特別心理的な制約を受けているようには見えない。

「朝の会をはじめます」といった瞬間に、好きな自由時間が終り、教室が公的な場へと変貌するのである。保健係が「健康観察」というのをはじめる。からだの具合が悪い人は手をあげ、「かぜをひいています」とか「足が痛いです」とか自己申告する。それから宿題、ヒトベン（ひとり勉強）、ハンチリ（ハンカチ、ちり紙）調べがある。（中略）

先生がいなくても、チャイムひとつでこういうことがほぼ整然と毎日行われる。正直言ってぼくは驚いてしまった。子ども同士の適当ななれあいなんて全くないのだ。特別ギスギスしているわけではないが、休み時間とは確かに空気が違っている。そして、クラスメートは、そんなの当たり前でしょという顔でやっているのである。4年生って大したものだ、とぼくは思った。』

ここには小学校入学以降3年間の見事な成果が描かれている。もちろんこうした行動自体を子どもに身につけさせることは、これ以前、それこそ幼児期にも可能であろう。しかし「先生がいなくても行われる」という点において、この時期が重要であることを忘れてはならない。斎藤（1997）は、この点においても以下のような鋭い観察を行っている。

『このしきたりを子どもは半分以上たのしんでいるように思えた。それは公的な秩序に従うこと、そういう秩序をつくり上げることに、満足感のようなものを覚えるからではないか。遊びやスポーツのルールにしても、例えばドッジボールで、強いボールを抱きこむようにして受けとめて、すぐさま目の敵にぶつけようとした瞬間、「あっ、線踏んでるもんね!」と敵に指摘されたとする。「ちえっ!」と言って、相手にボールを渡すとき、その子は残念そうにしながらも、どこか誇らしげでいさぎよいのだ。もちろん、はじめはこうしたルールはうっとしい限りだったろう。が、4年生ともなると、その抵抗にも慣れてむしろ積極的に秩序感覚を身につけていくようなのだ。』

こうした点をとらえて彼は『みんなが「よい子」になっていくのは、先生方の粘り強いしつけの成果とばかり思えない』と指摘しているが、この時期の超自我形成（規範の内面化）とはまさにこうしたものであるだろう。

## 2 思春期の心理発達

ところが、第二性徴発現の1-2年前から身長・体重の成長速度が急激に速まり、思春期への突入体制を整え出すにしたがって上述のような安定した潜伏期は終わりを告げる。このあたりから子供たちは、大人（親や教師）が眉をひそめるような汚い言葉を使いだしたり、使わないまでも興味を示したりしだす。あるいは、教師から見ると聞き分けの良い子であったものが、一見矛盾した教師の言動をめざとくみつけ「先生だって――でしょ!」と口答えし、それがさらに進んで反抗的な態度も出現する。家庭において親に対しても同様である。おそらくこの時期すでに子どもたちは、それまでの安定した親子関係からの離脱（自立）を目指して動き始めるといっていよう。そして、それが教師との関係においても、それまでの依存的な関係から自立への動きへと変わって現れてくることになる。

そして、児童期後半の子どもたちがある年齢に達すると、視床下部からの所定の情報発信により性ホルモンの分泌が始まり、その結果として第二性徴が現れる。これはそれまでの身長・体重の増加といった量的な変化（成長）に加えて、今までに経験したことのない未知の質的な変化（成長）の登場を意味する。こうした身体的変化を当の子どもたちがどう受けとめるかは、時代や文化によりちがいがあるとはいえ、その子本人にとってはそれまでに形成された能力・パーソナリティが問われることに変わりはない。思春期とは、こうした身体の大変化を基盤にして、つまり体が（いわば本人の意志にかか

わらず勝手に子どもから大人に成長してしまうことにもなって、心（つまりは精神的に）も子どもから大人へと必死に成長していこうとじたばたする時期といつてよいだろう。

こうした身体的変化を基盤とした思春期への突入以降、子どもたちの心理発達上の大きな課題は親からの自立であり、自我が親の自我からの自律性を獲得していくプロセスが始まる。こうした家庭における親からの自立の動きは、ほぼ並行して学校において子どもたちが教師の手から離れて自立していくプロセスを生み出す。

しかし、身体的にも親や教師を追い越すほど大きくなってくる思春期の子どもが、短期間で精神的にも自立し、しっかりとした自分というものを確立できるわけではない。だからこそ依存（甘え）と自立（反抗）が入り混じった複雑な行動は、精神的成長が身体的成長に追いつくまで、つまりは精神的にも自立し自分というものを確立するまでかなり長く続くことになる。小浜（1997）はこれを「『生理的大人』と呼ぶにふさわしい年齢と、『社会的大人』と呼ぶにふさわしい年齢」の「途方もないギャップ」と表現している。

そして、この長く不安定な時期を乗り切るために、不安を共有できる仲間関係が重要になってくる。こうしてそれまで家庭においては親、学校においては教師との関係が重要な安定基地であった子どもたちにとって、仲間関係がそれにとってかわることになる。

岡村（1998）は、この発達時期の仲間関係の重要性として1.親からの自立に伴う喪失感の補償、2.共通感覚の共有によるあらたに同一化する価値の拠り所がえられること、3.彼らの集団所属欲求に対して防衛的＝適応的であること、をあげている。こうした点で、まさにこの仲間関係は、彼らにとって「親や教師から心理的に自立していくときの根拠地（竹内、1987）」に他ならないといえよう。

### 3 児童期から思春期にかけての仲間関係の発達

では、その児童期から思春期にかけての仲間関係の発達とはどのような様相のものなのであろうか？ひとつのてがかりとして以下に筆者らが考えるモデルを素描してみよう<sup>(2)</sup>。

#### (1) 小学生（児童期後半）のgang-group

児童期後半の小学校高学年頃、親からの自立のための仲間関係を必要としはじめる時期に現れる徒党集団、従来の発達心理学ではギャング・エイジと呼ばれていた集団である。Hadfield（1962）は、この徒党集団を「集団的同性愛期」と位置づけ、その結束力においてこれより

以前の原始的集団と区別し、「権威に対する反抗性・他の集団に対する対抗性・異性集団に対する拒否性」という特徴をあげている。

この集団では特に同一行動による一体感が重んじられ、同じ遊びをいっしょにするものが仲間であると考えられる。この同一行動を前提とした一体感（凝集性）がもたらす親密さは、相手を丸ごとそのまま受け入れる状態といつてよいだろう。したがって、遊びを共有できないものは仲間からはずされてしまう。この段階に至つてようやく仲間集団の承認が家庭（親）の承認より重要になってきて、大人（親や教師）がやってはいけないというものを仲間といっしょにやる（＝ルール破り）ことになる。「ギャング（＝悪漢）エイジ」といわれる所以である。

#### (2) 中学生（思春期前半）のchum-group

思春期前半の中学生によくみられるなかよしグループである。この語源ともいふべきSullivan（1953）のいうchum（親友）は、こうしたグループから生まれた特別に親密な友人を指していると考えられる。彼はこの段階の友人関係をとりわけ重視し、それが児童期までの人格形成上の歪みを修正する機会になることを指摘した。

この段階では、同じ興味・関心やクラブ活動などを通じてその関係が結ばれる。ここでは互いの共通点・類似性（例えば同じタレントが好き）を、言葉で確かめ合うのが基本になっている。彼ら・彼女らの会話を聞くと、その内容よりも「私たちは同じね」という確認に意味があることがわかる。そして、よくその集団内だけでしか通じない言葉（＝符丁）を作り出し、その言葉が通じる者だけが仲間であるという境界がひかれる。gang-groupの特徴が同一行動にあるとするならば、このchum-groupの特徴は同一言語にあるといえるだろう。そして、この言語による一体感の確認から、仲間に対する絶対的な忠誠心が生まれてくる。

#### (3) 高校生（思春期後半）のpeer-group

やがて高校生ぐらになると、上に述べたgang-groupやchum-groupとしての関係に加えて、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合う関係が生じてくる。peerとは本来「同等」という意味合いを含んだ「仲間」を意味する言葉である。ここでは共通点・類似性だけではなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって、他者との違いを明らかにしつつ自分の中のを築き上げ、確認していくプロセスがみられる。そして、異質性を認め合い、違いを乗り越えたところで、自立した個人として互いを尊重し合つて共にいることができる状態が生まれてくる。

#### (4) 発達途上のトラブル

この異質性が認められるpeer-groupに至るまで、つまり仲間集団が同一であることを絶対的な条件とするgang-groupやchum-groupにおいては、仲間集団のメンバーに対して同じであるように仲間から圧力（peer pressure:Brown, 1989）がかかることになる。この圧力はきわめて強力であり、大人からみれば異様と思えるほど仲間と同じであろうとする心理機制を生み出す。それゆにこそ万引きや喫煙といった反社会的な行動が、仲間の圧力のもと集団で行われ、ときとして大人の想像を越えるほどに暴走してしまうのである。

また、仲間集団が同一であることを絶対的な条件とするgang-groupやchum-groupにおいては、同一であることを確認するための短期間に順ぐりにひとりをはずしていくゲーム的な仲間はずしが起こりやすい。（これは本調査においても数多く報告されており、第2章および第5章において「ローテーション」型のいじめとして取り上げられている。）けんかなども含めてこうした人間関係のトラブルから子どもたちが学ぶことの意味は大きいといえよう。こうして同質性を特徴とするgang-group、chum-groupから異質性を特徴とするpeer-groupまでの発達過程においては、仲間はずし（「ローテーション」型のいじめ）を含めた対人関係のトラブルが必然的に発生する。

### 4 いじめの背景要因としての子どもの心理発達

#### (1) 小学校中学年以降：自立のプロセスの中のいじめ

児童期後半から思春期にかけて、つまり小学校中学年以降、先に述べたような自立のプロセスが始まり、先の交通ルールの例でいえばどういふときならば危険がないとして渡れるかという自我の現実的な判断能力がついてくる。「赤信号は渡ってはいけない」と教えた大人（親や教師）から自立していこうとする子どもが、赤信号でも渡れるときがあると自分で判断できるようになることは象徴的である。

上述のgang-groupの出現もこの時期にあたり、子どもも集団自体が自律性を持ち始める。第2章2-3にみるように、本調査においてこのあたりからいじめの報告が増え始めるのもこうした心理発達を背景にしてのことと考えられよう。とりわけ〇〇菌といった形である特定の子どもを排斥するいじめが、教師の知らないところで発生することは、こうした子ども集団の心理発達と密接不可分といえよう。すなわち、こうしたいじめは子どもたちが独自のルールを持って教師の手から離れたところで自律的に動き出す中で起きている。それゆえ第3章で指

摘されるように、「そもそも親や教師に話をしなかった」あるいは「グループ内で子どもだけで処理しはじめ」ることによって、教師や親から見えないところで事態が進んでいく。すなわち被害者、加害者ともにそうした事態を大人に伝えることはなく、ましてや大人の介入をよしとしない。子どもたちが心理発達上、大人からの自立を目指して離れていく過程で起こることから考えれば当然のことといえよう。

しかし、第5章で指摘されるようにこの「不潔型のいじめ」が「ある程度マクロな普遍性」を持ち、特定の子どもの排除に適用される基準（レッテル）が、「きたない」あるいは「のろい」という学校教育ではマイナスのものとして教師が子どもたちに提示してきたものであることは、先に述べた超自我形成という観点からいえば深く考える必要があるかもしれない。つまり、「友達とは仲良くしなくてはいけない、排除してはいけない（=いじめはいけない）」というルールよりも、「きたないこと、のろいことはいけない」というルールの方が子どもたちに刻み込まれてしまうのだろうか。あるいは、「友達とは仲良くしなくてはいけない、排除してはいけない（=いじめはいけない）」というルールが十分に身につかないのだろうか。先の斉藤（1997）が描いた、子どもたちが身につけていく学校教育の公的秩序の中において、朝の会で子どもたちが守ろうとしているルールが、対人関係のルールよりも重要視されているということかもしれない。いずれにしても、こうしたいじめの背景にある子どもの心理発達と共に、それに大きな影響を与えている学校教育の存在をとらえなおす作業も当然必要だろう。

#### (2) 思春期以降：前思春期の侵食の中でのいじめ

日本を含めた先進諸国においてこの1世紀の間に子どもたちの身体的成長、とりわけ第二性徴（つまりは思春期の始まり）が早まったことをとらえて、発達心理学では成長加速化現象と説明してきた。これによって成長の早い子どもは10才ぐらいで第二性徴が始まる一方で、遅い子どもは中学卒業後ということも起こりうる(3)。ところが、牛島（1991）が指摘するように、このことが当の子どもたちの心の発達にどのような影響を与えてきたかについて検討したものはほとんどみられない。例外的に2・3の精神科医がこれについて発言しているぐらいであろう。

たとえばその牛島（1992）は、病理的な事例をふまえて「最近のように第二性徴が11才前後で現れてくると、まだ母子関係の方が優勢なときだけに、どうしても母子関係の濃密化という発達とは逆の方向に後戻りしやすいようにみえる（p47-48）」と述べている。また、中井

(1998) も「以前に比べて第二性徴の現れるのが早くなった。その分『前思春期』ともいうべき思春期直前の、つかの間の穏やかで、ある意味では思春期よりも成熟した時期が侵食されているのではないか (p52)」と指摘している。

確かにこの成長加速現象は、安定した子どもの児童期、すなわちフロイトのいう潜伏期を、彼がそれを理論化した時代よりも数年は短縮してしまったことになる。成長加速化現象以前の子どもたちが、時間をかけて十分な知的発達を遂げ、仲間関係を育んで社会性を身につけると同時にある程度親からの自立を成し遂げつつある10代半ばに至って第二性徴を迎えたのに対して、今の子どもたちはそのすべてが不十分なままその時期を迎えていることになる。少なくとも、第二性徴を迎えるまでの安定した児童期後半、つまりは前思春期はかなり短縮（中井（1998）のいう侵食）されている状態にある。

以前の子どもたちでいえば10代半ばまでのこの何年間かは、現実判断能力という点で、超自我に対して自我が柔軟な対応をとれるようになる大事な猶予期間であったと考えられる。たとえばこの時期は、認知・思考能力という点でPiaget（1964）のいう具体的操作から形式的操作への発達時期でもあり、いわゆる抽象的思考が可能になっていく。こうした認知・思考能力の発達は、自分自身や親、またその関係を冷静に対象化することを可能にするという点で、現実判断能力の土台ともいうべきものであろう。

成長加速化現象による前思春期の短縮（侵食）は、今の子どもたち（そのすべてというわけではないが発達の早い多くのもの）にとって、こうした自我の現実判断能力を育てる穏やかで成熟した時期の喪失（ないしは短縮）をもたらした。それゆえ一人ひとりの自我がいまだひよわである段階で思春期に突入した子どもたちが、それまで以上に親や教師からの自立に際しての根拠地である仲間関係を必要とすることになっているのではないだろうか。

先に自立のプロセスが始まって、交通ルールの例でいえばどういふときならば危険がないとして渡れるかという自我の現実的な判断能力がついてくること、すなわち「赤信号は渡ってはいけない」と教えた大人（親や教師）から自立していこうとする子どもが、赤信号でも渡れるときがあると自分で判断できるようになることは象徴的であると述べた。この例でいえば今の子どもたちは、一人ひとりが自分で判断する強さを持たないまま、「赤信号みんなで渡れば怖くない」といった状態で渡ってしまうようなものである。このとき彼らは一人ひとりが自分

で危険性の有る無しを判断しているのではなく、仲間への同調性に引きずられているといってもよいだろう。「いじめ」でいえば、それに加担するものや観衆ばかりで、止めるものがいなくなっているというのもこうした一人ひとりの自我のひよわさをうかがわせる。

そう考えれば、児童期から思春期にかけての仲間関係が持つ治療的な力、あるいは発達促進的な動力をうまく引き出すことができずに、それが逆にストレスになっていじめを含む対人関係のトラブルの多発が目につくこともうなづけよう。つまり、一人ひとりの自我がいまだ未熟な子どもたちが、それでいて身体的には早くから思春期に突入してしまい親から離れようとして仲間関係に過度に密着する中で、人間関係から学ぶというプラス面を十分に生かすだけの準備（精神的な成熟さ）が足りないということかもしれない。

これに関しては、油布（1996）の『『いじめ』にみるもっとも重要な問題は、いじめっ子・いじめられっ子のどちらかに非があるというような問題ではなく、子ども世界の相互作用能力全般の低下の問題』との指摘が重なるといえよう。筆者は、学校教育の中で起きているいじめの背景として、ここで取り上げてきたような子どもたちの心理発達を考慮していく必要があると考えているが、それをふまえて子どもの対人関係能力の発達を学校教育がどう援助していくのかという視点が重要になってくるだろう。

## 注

- (1) おおよそ6-12才までの性的活動性が減退する間歇期およびその時期特有の心理的特性を表す言葉としてFreud（1905）が用いた。この時期の子どもが従順で教育しやすいことから、性衝動が生物学的に減少するとが推測された。しかし、現在では自我の防衛的な衝動の構造の発達に伴って、防衛と衝動の間の平衡状態が成立するために安定すると考えられている（Moore&Fine,1990）。
- (2) 保坂・岡村（1986）は、学生相談におけるグループ活動の事例研究からこの仮説を提出した。なお、この仮説はRedl（1942）,Hadfield（1962）,Sullivan（1953）,Grunenbaum&Solomon（1980）,Fine（1981）を参考にしている。また、斉藤（1986）、鈴木ら（1999）が質問紙調査によってこの仮説を実証的に検討している。
- (3) 近藤（1988）によると、女子の初潮年齢の平均は1945年頃14才4か月であったものが、1970年には2年

以上早まり11才11か月となった。1985年以降では、小学校6年の後半から中学校1年の前半にかけての12.4才に集中しているという。なお、医学的には10才未満（特に8才未満）で迎える場合と18才以上になってもない場合を問題としている。一方、男子の精通体験は、現在12才で2割、14から15才で5割、16才で8割が経験するとされる。

## 文献

- Brown,B.B. (1989) The role of peer groups in adolescents' adjustment to secondary school. Berndt,T.J. & Ladd,G.W. (ed) Peer Relationships in Child Development. John Wiley & Sons Inc.
- Fine,G.A. (1981) Friends,impression management, and preadolescent behavior Asher ,S.R. & Gottman,J.M. The Development of Children's Friendships Cambridge University Press
- Grunenbaum,H. & Solomon,L. (1980) Toward a peer theory of group psychotherapy: On the developmental significance of peers and play. International Journal of Group Psychotherapy 30,23-49
- Hadfield,J.A. (1962) Child and Adolescence Penguin Books
- 保坂 亨 (1998) 児童期・思春期 下山晴彦編 教育心理学Ⅱ－発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会
- 保坂亨・岡村達也 (1986) キャンパス・エンカウンター・グループの発達の治療的意義の検討. 心理臨床学研究 4 (1),17-26.
- 小浜逸郎 (1997) 大人への条件 ちくま新書
- 近藤邦夫 (1994) 教師と子どもの関係づくり－学校の臨床心理学 東京大学出版会
- 近藤俊朗 (1988) 思春期の性 西山詮・稲村博編 親と教師のための思春期学 2 性 情報開発研究所、45-54
- Moore,B.E. & Fine,B.D. (ed) (1990) Psychoanalytic Terms & Concepts 福島章監訳 (1995) 精神分析事典 新曜社

中井久夫・河合隼雄 (1998) 見えにくくなってしまった青少年の「心の窓」を開く術はあるか AERA No.46,52-53

岡村達也 (1998) 親からの精神的分離 古屋健治・星野命・山田良一編著 青年期カウンセリング入門：青年の危機と発達課題 川島書店、209-221

Piaget,J. (1964) Six Etudes De Psychologie 滝沢武久訳 (1968) 思考の心理学－発達心理学の6研究 みすず書房

Redl,F. (1942) Group emotions and leadership. Psychiatry 5,573-596

斉藤 次郎 (1997) 気分は小学生－百石小学校4年竹組留学記 岩波書店

斉藤憲司 (1986) 思春期における友人関係の発達の變化 東京大学大学院教育学研究科修士論文

Sullivan,H.S. (1953) Conceptions of Modern Psychiatry. W.W.Norton. 中井久夫・山口隆訳 (1976) 現代精神医学の概念 みすず書房

鈴木由希子・熊谷尚子・水野薫・高嶋裕子他 (1999) 中学生の友人関係に関する研究 心理臨床学会第18回大会論文集、530-531

竹内常一 (1987) 子どもの自分くずしと自分づくり 東京大学出版会

牛島定信 (1991) 青年期精神療法の治療機転－とくに母子の分離をめぐる－ 増補青年期の精神療法 馬場謙一編 金剛出版、320-341

牛島定信 (1992) 同性関係から異性関係に向かって－思春期における交友の意味 こころの科学44、44-48 日本評論社

油布 (1996) “いじめ”問題に関する一考察－関係性の病理 表現行為と他者理解 福岡教育大学紀要45-4、199-205

<付記>本章は、「子どもの成長 教師の成長」(近藤邦夫・岡村達也・保坂亨編、東京大学出版会)の終章を加筆・修正したものである。